

之を能率化し、産業化するための方法はすべて今後の研究にまつわけで、経済的に成立つかどうかの見としいはまだ立っていない。室内で孢子付けをするという場合、孢子をつけるのによい時期が秋のごく短い期間で、一年のあとの大部分は設備が遊んでしまう点が特に経済上の難点になるだろう。

なお糸状体からの孢子をすぐ利用するかわりに、早く夏～初秋に室内で育てて、之から出る孢子又はすりつぶして出る細胞をヒビ等につけるのが能率のだということが倉掛氏(愛知水試)により提唱されている。

このほか、糸状体をへて二代目のノリを育て、種類、品質の性質の確認が行われ始めている(須藤)。というのは、アマノリ類は外形が簡単でしかも環境条件で変化し易いので、種類の性質がつかみにくいためである。遺伝の研究、更に品質改良に進展出来るかもしれない。

こうした目新しい仕事にのみとびつかずに、むしろ糸状体の知識をもつて、従来の孢子をつける場所をしらべなおし、まだ未利用の場所を見つけ出すということにもつと努力がはらわれてもよいのではないだろうか。

エゲロード著

ハワイ産管状緑藻類の研究

L. E. EGEROD: An Analysis of the Siphonous Chlorophycophyta with Special Reference to the Siphonocladales, Siphonales, and Dasycladales of Hawaii. Univ. of California Pub. in Bot. Vol. 25, No. 5, 1952.

隔膜のない単一な多核細胞体、及び後に隔膜が出来て多くの多核細胞からなる体、或は生殖時にだけ多核の体となるものを著者は Siphonocladales, Siphonales 及び Dasycladales の3族に入れてハワイ産の種類を研究している。

この分類系は大体 BÖRGESEN (1948) に準じ、従来 Siphonocladales に入れられていた Cladophoraceae を segregative division をしない事等により、この族から分離しているが之には多少疑問がある様である。又 Siphonales に入れられていた Vaucheriaceae を生殖細胞の形態学、及び他の生理学的立場に據る SMITH の説をとり、Xanthophyceae に移しているのが著しい点である。

Siphonocladales は多くの多核細胞からなり、不規則な分枝をし、segregative division を行い、色素体の網状をなす族であり、之にハワイ産の4科、7属、12種(中の1は新種)が包含されている。

又, Siphonales は FELDLMANN により Caulerpales 及び Eusiphonales に分離されたが、著者は OLTMANN の説により、体に隔膜がなく、体は非相稱で、石灰を被るものがあり、色素体は網状に連絡せず、配偶子は栄養体自身に、又は配偶子嚢に出来るものをこの族に入れている。之には 3 科, 7 属, 19 種 (中の 3 は新種, 更にその 2 は Silva のミル属の新種) が記載されている。

更に, Dasycladales は PASCHER (1931) が放射相稱の体を有する事により前の 2 族から分離した説により、体に隔膜がなく、生殖時にだけ多核、石灰を被り、色素体は網状に連絡せず、配偶子は配偶子嚢中に出来る族とし、之に 1 科, 3 属, 6 種 (中の 1 は新種) が明かにされている。

(北大理學部植物學教室 阪井興志雄)

學會錄事

本會會長山田幸男教授は去る 7 月中旬、ノールウエー國、トロンドハイム市に於ける第二回國際海藻専門討議會 (2nd International Seaweeds Symposium) に日本代表として出席のため 7 月上旬羽田空港を出發され、同會議終了後、 Lund, ダブリンを始め歐洲 9 ヶ國の著名なるハーバリウム及び大學、研究所等を歴訪、約 2 箇月間の長途の旅を終えて 9 月 6 日無事歸朝された。